



法華世尊所說

卷之二

特
遠 18
2549
5-51



千方之間者般若五郎鬼面六代西個二様乃共の後
出立く東あがり初ふす風情しておふくく
もふ来り休息せし又おし暮も己のけりけり
なると巴葉子の清供の湯きいけ池のほりり
飯のま後せん古くはたうを東海道といふも
乃おの葉店者賣たむといふものもたむは
西へたりとも馬鹿してかゆく用きとる不代干飯を
志めしむを以て皇飯しとるきとなり多く女中も
くらうつらうお代干飯をとり出さし中飯と調ふ
彼二個もかこりしとて山竹筒やの物より酒を
うち飲くと初たふもくらを振舞舞くお代干

下節のたひ一聖代酒の歌も酒をくおくらりき
酒の次もふ石箱六りよやうきりけり
鷹とて足踏りうらな清方とて何乃清用う
清方向まやらんとおふ中問もこまき
主人とつふいおふ中問もこまき
うらうら夜系糸へお枕とらふこ清方向
若ふふ鬼面つがさまを代もりより高位の清方
ん文やとり清方結く秘の愛人うして
さまふまでもあ初程の若もたりまは
帰るとおふお代干の清方とて一首
まうせたまふか一思もはふこらきも

数いハもさぬべし是くせし古歌をよと吹せりあ
かき川をこの五文字の独よ折向して旅舟の迷路を
一首の歌よりはねぬくちをよ

かき衣きしひをよはし遠らまはるぐきぬる旅をよ
やりの友人をよ吹して即吹の一首古代の名ふのめ
切もあをよと感るもあて有るは記略をよ
述もあをよとあまき出りしが解をよ
のらあはるる名歌をよらんハ業平のまきなり
とやねるよりけはよ侍侍してまねを討り
陵の仇をよとせよせんをよと先へけ
あべきをよ助乃志けとの乃ふ男をかくし今やと

かけり

今ハ橋は古路ハ杜若の竹もけり
不官道よとせ世は鍾若とけり
業平塚しとあもはり
あまのゆもは牛田付し
ゆしとせしやたか
其侍も池の形も芝系も古
あまのよしあまのよし
せし路しよま
平の傷解あまの
まもを古あまの

海乃素田とてなるはくは也星移り素あつり
 ともさきまら路も定くあを地敷と改めし
 不るりかじかくも個の織い業年と討せんし
 う程なくまを中將ころとて何の心も付なき
 了たきつを二個は仕瀬しとてぬきはまき切
 律依の人をわくは女中達なきは白母やお
 護ぎまきまも門終ひのうも出ふ終て
 う切ちりしても個等しく中馬をくかけ
 變はたふあは忍持られをるるより
 て心ほり曲者どもあまきほはじと二個
 あり個はかき押りひらけは万ハあるど

又よきもあしくまをさきとて鬼面六も
 でまのまの助る者もたて対子
 何んか大層なありし火とかなの
 とくはし知しせり思控り何
 難刀かいと遊りを井筒
 めを遊んかつりて一
 べきすは後と控まじと再び人
 さうと趣きまよふまよふ又
 後をりを張らるる千方
 いかるも難題の和歌を
 心まげく遊まらるるも病を



千方宇谷峠又
五つを伏して却て
大い敗れす

業平のつもりや世あへ入世せやんまぶきあつても
 誰を以て市志せやんまぶきしけ長直澤のやふ西の彼
 流り者幸の我身出あのをうあまは他国も三まぶ
 業平の流市在病とらね逢まいせ後流の業平とせ
 まあやうは五身ひやたしししし市村を徳もせま
 をらうせ娘あひまよらこひまを天孫助さる
 財も急ぎけ由事勅めくまらるべし徳人もいまる
 ぬべししそ首の頭を志まあして是をまらるし業
 平心ふきせうまらるし那修の流しま其流
 流あらるし川のあまのうはまもまらるし人々逢ぬ
 ても流り若い市あを懐中して西乃林蔵と名をいへ

千方角田川卧兵

恐摺潜水底復仇

既よ入るいりあ秘多岐の於く勢やあせ来るあし
 待りしにが恐摺さるししついでけああ系しして在る
 先んずり時人をおまらせまけ方より道とをまら
 べししそまらるしたるゆゑまらるしけ初めはまらるし
 此を末は林蔵へりりあす町をかこ来る板井中逢
 乃切まらるし千方の回数をあらうりはまらるし業平
 くのり一個もけりし通まらるし三十余人ぬきけり
 切りかふけりも元素是快のあまらるしおるまらるし
 ませししり嶺岨の板中より出動をちりして戦うりか

一、業平は乃修り其乃進進をすし一、乃て馬を流し
 うつりあふかもはもたまふ清先は是立業平令到之即
 戦ひる中の方勢乃流よりさしとおありし切し
 抄りしもよりさるあなまきばさしりあもき千方が勢今
 一、乃後之敵をたふさば戦ひ勢もあしむるをたふさ
 方りし一、敗れも恐懼へこれをもさしつらりかし
 一、乃刀亦さしりてあまもほしと進み又切したをけし
 て千方も既におきぬづく見へし一、乃人殿若五郎鬼面六
 一、乃留すりし一、乃を捨て防ぎし方ふあまののめとたを
 一、乃り千方のゆへにたふしをさしつらり進しはさし
 殿若五郎鬼面六二人ともめ首をたふしし勢平一級

勢平を乃げし勝利をよりさし業平は乃井筒に
 一、乃面ありし中せ戦ひこれ進の利を奪ふし
 於勢平を乃げし一、乃棟梁より千方を折渡し
 彼再び織流を修復して出来し一、乃我はこれより武蔵國
 一、乃間の里より乃と恐び隅田門より乃り對面を乃
 勢平は乃げし一、乃乃折れし隅田門より乃りお侍進
 一、乃かしつらりし一、乃乃千方をたふしし恐懼ケ勢の仇を乃ら
 一、乃たふしし一、乃其外互い乃配を原を乃り引わらし
 業平は乃り入る郡一、乃乃を乃りし一、乃乃既に入る郡
 乃り甲し一、乃乃あまの乃り乃り日も既より乃り
 一、乃乃乃乃乃宿をかたげし一、乃乃乃乃乃乃乃一、乃乃

江原草子巻四



井筒姫すゝたけは
都を尋ねたよ
おぼろ人あはれ
いふことあり
あはれさ
たけを
おぼろむ

江原草子巻四

て娘を嫁せん中こそは新ひりし東家より藤原氏の娘を
 るがねくつちり清方がありしも時音のみやびやり
 たりん清方へ娘を嫁せんとまぬれあはれいそ改まり
 七重のついで定まりまもあし初めくつ文書せしふ
 幸ふあまもも時音の程くらやましくおまらるるが
 むとがまももあし時音の程くらやましくおまらるるが
 まももあし時音の程くらやましくおまらるるが
 したまひ一首の物語を詠じてこれをとくまふ
 我うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 ねまねまねまねまねまねまねまねまねまねまねまねまね
 ねまねまねまねまねまねまねまねまねまねまねまねまね

侍部御孫とあし女はけ事たりとも程は藤原の千方
 ハウ越山とあし大い敗軍のゆふひ孫まももあし
 二人ともりて危き事場をばぬがまももあし今に懐昔
 通してけし業平の首をまももあし我彼が為し
 振らり西院あし竹面自まももあし名朝の光懐は
 るあしまももあしやうやく控二人のほ若たまももあし
 いかたひごしつちけ計畧をまももあし時をまももあし
 川の海ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 らいたアし改め眼のくら返まももあしまももあし
 むと千方め向まももあし海へ舟と艘の舟屋まももあし
 穿控をこし必定けし業平まももあしけ川をば

而を川のまゝに桂とぬれた水はあはせりしに流るるもふも
 ぐらふせんのエたる色は外への海に波も近辺にさ
 らしむけり艘をがらと西岸につまがせ業平の来る
 と待たぬ身ハ小楯共々塔藤宮にぞくお身と
 やいし〜かた〜たる由海き森の戸ふかくま〜被来
 がけあままの〜海よあ〜忽ち千方水中に入門く
 水雲をわんと〜水橋をゆ〜れど其國を〜て
 うち居り〜が〜あ〜井留姫〜は〜角田門〜業
 平の〜出合ま〜せん〜の契約〜を〜踏を〜せ〜ぎて
 お程海を〜ら〜すぎ武蔵國〜出〜下総の境〜から
 角田川乃西の岸にまたたけり

按むるにけ角田川の古跡説多〜今に形はあ〜川は
 柔たろや梅舌塚も名〜と〜後人け西〜あ〜たろ
 地〜〜らん〜一〜業平の奥物〜歩り向〜は武
 蔵より下路〜を〜趣〜下路〜越た〜事不審
 その上更級日記は下路乃中武蔵乃境〜はる
 ふしかに〜い〜又む〜〜さ〜ぬ〜の中〜あ〜あ〜と
 川〜に〜五申持の〜〜人〜と〜ら〜り〜
 け〜よ〜り〜説〜さ〜〜たる〜或人今西持の吉平
 といち〜〜下路〜乃〜あ〜〜門〜あ〜〜す〜
 なるもあ〜た〜す〜も古〜〜い〜〜や其田〜す〜
 村〜に〜在〜取〜も今有〜先〜入〜と〜川〜今〜入

川より本母寺の傍の流る古くは川下傍葛飾郡
 那古色とも當時は武州を治郡又属としてしつせり
 今千燈の太橋といふは江戸より巽州へ下る小湊系
 かりらるるいふ今の西國橋乃地より下傍へ下りて川
 上へ流るる上りて下へ出るゆゑに名を承りてしつ
 ちうしんり

井筒娘の川門の西乃岸まゝ善なきども流約末元
 末業平の末の末をまゝとんと何をも岸に承り
 待あゝかあは流しちどもか糸く千方に殺すはた
 是は疾舟ののき目もくまぬれ航は流便せし故是れ
 けくつご業まゝく流らんとい艘の舟は名をくはして

おせは事でもゆゆひたまを流しち千方に計畧すはふ
 ちまをこもよりらるる岸を雜まゝ川の邊へ舟をおくは
 さり折れも水の上より白紙を純もくしりしとあきまき
 大さくもろくかじりまゝくかじりて魚を取喰さま入る系
 ぬ目ちうまぬもももも何をも其名を知りて流すはこ
 まを問ふこももん流るるまへし井筒娘のあつて
 名はせりいさく向んみやろを御せよ人をばらるや
 ちうやと遙るわとおんやまゝ君のゆきを待たむ
 うふ忍抱は家前よりまたきせむ群まみふ方をお
 縁りあましがはことなとら娘は向ひあま流流る
 いは近何のゆもろくあ上るあ向まりて魚をくらう

三三三三三三三三

十一

人も逃ざりふ儼々を立さるゝいひなきけ水産は仔細を
あらん侍供の人々何れも油断なしたまひしを幸水産は
へう勤勤を窺んらひ推し孫持刀を引抜口よりハ
へ上の衣を脱捨ひく人の着衣ももつて舟ごとく水に
浮へて入るなり船中の人々あはれあはれとつゝをかき何れも
ぬれぬをばさむいづれも水中に入らばき若もあ
るゝ衣束の千方ハ屋先の糸繰乃達若もあはれ只一個
葉又川上より君びゆまみある屋上階にのりて海へ
船をぬんと申す一葉もあはれも君若これをもつて
水中よりあはれと申す又女持刀もあはれもあはれも
あはれあはれと申す孫持の池より水産を水産に孫持の名

人あはれと申す又入りて陸地はあはれあはれと申す次千方と
水産は女持刀を申す又あはれと申すあはれと申す一打はし
て我斗畧をばさむと水産は細を引ぬき切けり
け方ハあはれと申すあはれと申すあはれと申す面例と
千方と申すあはれと申すあはれと申すあはれと申す延擲と
たさもあはれと申す水中よりあはれと申すあはれと申す
一息継んと水産はあはれと申すあはれと申すあはれと申す
け年月をばさむあはれと申すあはれと申すあはれと申す
これ天のよみなり千方なりあはれと申すあはれと申す
妹若持らみ持刀あはれと申すあはれと申すあはれと申す
あはれと申すあはれと申すあはれと申すあはれと申す



千方水一勞多く漂人をほりし組付せ忍指千方の首をふりつ
 かき切りと取を口にふくみ血刀引提水上は流しと臣の類稀なる健者の
 働者若舌を巻く此を感じさるふかきけるまか折しも業平の心入る川
 を舟をまかせ船を押切けし西へありしひけ有後を又たさるより
 忍指の柄の程を海へ感し流し流し舟に乗せし業平金剛
 もろく流ししちをこぼして其計畧を白紙にせ候も元乃舟ふ
 去りし者ふ流しし十餘人の若し討てか子小織もこけしと
 逃出まを逃けけしとふ室授真妙征伐乃門出の血祭宸先しと
 首赤落し隅田川原小竹流流してこれをおけ勝周作の舟よりち
 去りしこの岸へ押渡し陸奥さして趣きよふ其の程のさししく
 目も夜よりけし風情なり

信夫指在原草紙卷五六尾

○著作堂新編函字小説近刻見次書肆 磯子堂合梓

水滸畧傳

曲亭主人著

柳川重信画本集六卷
 来癸巳冬十二月發販

○の書ハ水滸傳を百八人の好漢の畧傳を編述し且出像あり其画精妙なる
 文簡約なり聊も送漏ありとて百二十回の長物語と皆の數卷を縮め
 たり看官倦ざるのるを記臆の爲し便利なり地理官名を紛らわし要
 畧めを記しつゝ看て亦裨益あるとあり水滸傳の始より作者の隱微言か
 は金瑞李贄等これを悟らるるの故那那の評注精細に似るもの作者の本
 意不違はる曲亭の翁の公認あり今本集に附録して又略評を述んこと
 下た是を繕くは彼の情由も亦かる故のけと看官もく亮悟しといふ
 まる水滸傳の妙作を知り不足れり世に小説を愛る君子は珍重せし一奇書

水滸後画傳

曲亭主人譯文

出像 柳川重信画
 第一輯五卷 近刻

右水滸後傳ハ明の鴈宕山樵が水滸後傳四回と國字小譯一通俗七加はふ
 續像を以て且後傳の趣向の立たる宜なるものある回ハ翁と之筆削を全美の一書に
 るさんと然れ後傳の見らるる前傳殘剩の好漢二十二人あり七六公孫勝呼延灼関勝
 朱仝李俊水子心載宗燕青孫立孫新阮小七柴進朱武黃信樊瑞樂和童
 威童猛宋清裴宣穆春蔣敬蕭讓金大堅安道全蔡慶杜興楊林鄒
 淵凌振皇甫端顧大嫂是之内中前傳第百二十回は七人の死の事あり七人あり七人呼
 延灼の関勝の阮小七柴進の載宗の李心載の杜興の就中載宗をその靈徽宗帝の
 夢に足えて御道守せざる事あり又後傳載る者皆彼作者の誤りある錯誤ハ他
 更て前傳の死したるものも又後傳の生きたるものも亦批語を以て七人彼拙劣を補れん譯
 志ある世に所の通俗本と同かれば唐山態小疎を元姫御連の筋とくころりて
 小もその文鄙俚なるを伏稟を賜顧の君子先書名を認り用板の日と俟あか

印行書肆

大江坂

河河内

屋屋屋

茂長平

兵兵兵

早引人物故事

東都關惟在著

横本全二冊

△人物故事 上古神代より近世まで
 希王公卿地卜人等和歌傳文の多き名ありし名僧
 賢士の畧傳より奉朝儀門医学系人倣神河孝士
 列女の傳紀とて 歌 武勇勇士豪傑源氏
 小説のへどもさるるの如く 奉朝儀時代
 小説と卷をまじりて けいせい名りる人
 好士の類い倣神傳優よいうきと名とり
 傳うりのも載つまじりたり。且素る事
 要しいろはをもて部類をころらた人ハ保元二即

伊勢三郎義盛 判官義経の家臣 康頼 平判官入

乃法名性照と号し治承九年謀叛 鬼累の流され

後赦免 東山双林寺に籠り 頼朝の時 白雲の尾の如く 同小

任 平物 延壽 長谷川 長者が娘 容白 志 義 七

改田藤十郎 越後の人 上原にて役者 天竺和食の十子 名 既

費首 宝永六年 平二を死 世に同 名 既

字と号は 平 事 出 平物 日本

拓 書 求 便 古 人の好悪

跡と尋ぬるに 先 書 授 畧 傳 之 救 部 の 群 之

文政 倭節用集 悉改 倭人成

大本 全

△世小節用の大冊多しと云ふも 古板のきり増補して再刊の物を

字形 簡易 且 服 工 庸 書 の 誤 字 必 少 一 び 倭 節 用 集 師

後 評 通 考 の 依 して 字 畫 音 訓 を 類 後 案 之 悉 改 上

世 介 と 加 茂 季 重 大 人 控 如 かつ 今 古 畧 同 校 補

雅 佐 の 文 字 り 増 益 して 世 介 之 後 の 余 城 以 書

考 小 和 漢 の 山 川 名 取 同 系 事 定 と 画 き 世 界 方 圓 日 本 圖

考 小 和 漢 の 山 川 名 取 同 系 事 定 と 画 き 世 界 方 圓 日 本 圖

考 小 和 漢 の 山 川 名 取 同 系 事 定 と 画 き 世 界 方 圓 日 本 圖

考 小 和 漢 の 山 川 名 取 同 系 事 定 と 画 き 世 界 方 圓 日 本 圖

考 小 和 漢 の 山 川 名 取 同 系 事 定 と 画 き 世 界 方 圓 日 本 圖

五花生菓子系湯衣お基人相子觸指自。二世相方位日
 取吉画。美樹刻掛。堂上官威の認百官名次前字の要
 往來書状案文子形代文雜形。名実切中。願後の口信
 諸病妙業呪術傳。刀刃古今逸り。那の果。奉中約の
 三代武將傳。神代よりあ時ふり。教ふ載の伝説あり
 室極了極細ふき。外世俗要用の雜事。夥々及集じ
 文人雅客信侶文房小流。遠忘の志小懐ふ。是り。右春
 下の目録一季。ては夏秋近遠の教ふれ。著。中右小
 重く懸候。く。勝。て。の道。上。を。は。長。年。
 今。ま。し。南。里。を。多。人。増。補。し。て。凡。三。百。五。十。余。紙。の。大。本。に。な。り。す。

浪速書林群玉堂

河内屋茂兵衛版

近代世事談

東都誹林沾涼大人著
 全部五冊合卷三冊

此書(東山殿より)以末吳服食菓草木花菓財萬物近代未始の年曆
 諸流書画詩歌連誹香茶生花遊藝及芝居ホの起原人倫雜事年中
 行事故實何の頃より初と云事と委敷舉を六机右置て博識の捷
 徑と云

近代世事談二編

楠里亭主人著
 全部五冊繪入

此書(天地萬物の廣事小冊)盡くをくらひ。物と用不用あり。其用と
 ちと。原始の知をき。詳。て。世。は。行。や。い。も。百。有。余。年。の。往。昔。に。あ。り。て。遺
 漏。少。く。ら。ひ。故。今。二。編。と。綴。て。近代の草木氣形食菓の類百年以末の類。ま。ま。不
 船時寶猶要用と詳。て。盡。圖。と。頭。に。は。所。謂。サ。ラ。マ。ク。子。シ。ヤ。等。是。と。り。海。音。相
 樸耳鬢櫛と指。る。事。能。役。者。謠。曲。高。砂。老。松。の。詠。古。錢。の。奇。事。駱。駝。十。千。牛。

銅舎人の弁武術者系譜禁中年中の公事故實年号改元の式彈左三呼下
非人といふ事人事雜事よあけり島と奈との解利害の字義真草鳥皮の違
刀劍文房道具の類塗物磁器衣服織物木綿類出所ハ夥敷載て詳なり尚
人事當用の事物始原ハ數百条穿鑿くまを舉記ハ兒女童蒙ハ貞安
とんと前篇より比して平らまどりとあるなりハ博覽の君子座右ハ携て急索
の遺忘ハ備て可なり。

同三編 全部五冊續上梓

畫本錦之囊 全冊 東都漢齋先生圖

萬職圖考 初三編全三冊 東都葛飾戴斗先生圖

右の繪本ハ金銀銅鉄象牙居物彫物師堂塔宮殿の彫物根付師飾并叙諸金具師陶器
錦繪沈金時画のハ烟管張花布糊置上繪染物形幟画の外諸職さるりの内ハ因繪
山水人物花鳥獸物ハ職巧の寫真ハ求るに至りて便なる繪手本あり。

書肆 大坂心齋橋博勞町 河内屋茂兵衛梓

清客陸品三先生秘傳方

養心丸

夫百病を氣より生むるとハ宜なるを都て男女も四時乃
外邪を侵さると内真氣を痛む驚き悲し又怒り苦むより
氣鬱し留滞く和さると漸く氣耗血衰ハ心つれ脾胃傷
氣血順環あらざる故に食物消を津液めぐらば諸病を
發せされハ此養心丸ハ氣血の順環を主として五臟を調へ中を補
ひ元氣を益り精力を強く諸病を治さるの良劑なり是より
て先第一に用ひべき病証の大畧ハ
▲氣鬱し壅る証 ▲胸やうり腹張とい証 ▲手足厥冷証

平生眼上重く頭痛する証 ▲夜寐ぐるぐるしき証 ▲聊の事やある証
 此の事より腹を立る証 ▲寒熱往來ありて眩暈ありしき証
 胸さき速きなり嘔吐ある証 ▲秋より未陰氣に至れば何れもく不勝証
 婦人病原よりかぐく只ざらくと腦しき証 ▲平生耳のちる証
 此余癩痞食傷寐冷霍乱泄瀉痢疾瘧疾船醉酒醉
 小児の五疳驚風等いづれも即効神の如く用ひて其驗の速きを
 ぞ知べし

但し産前産後の婦人の用也
 長等東築町 鶴江堂
 本家調合所
 大阪心齋橋博勞町
 河内屋茂兵衛
 賣私所

美少年録 評判記

本房曾て文溪堂と相謀て毎年刊布の四字小
 説美少年録 俠客傳の二書世評高妙月日不
 續刻を促しぬ諸君よりあつて尚亦本集の
 作者曲亭翁の年々書共各一集五巻成
 刊行せむと欲せしめ美少年録既に二輯を著
 したるに客傳の續第二集とせむと欲せしめ
 第一集と續第二集とを二書相並べて四集五巻と
 發販せむと欲せしめ雲霞の君子の記と認て
 書林 君羊玉堂敬識

○家傳神女湯 諸病の妙薬 一包代百銅
 ○精製奇應丸 大包代金貳朱 中包代金壹朱
 ○熊膽黒九子 小包代五ト 大包代五ト
 ○婦人冷利の妙薬 滞り不用之 瀉澤氏
 製菓本家神明神下向開町東横町 瀉澤氏
 弘所元飯田中坂下南側上中の向 瀉澤氏

天保四年癸巳春正月吉日發行

書林

江戸小傳馬町三丁目
 丁子屋平兵衛
 大阪心齋橋筋博勞町
 河内屋茂兵衛

